01

〝わたしあい〟の風土を守り、地域教育の未来を描く

Happy Collaboration 合同会社
高梁 100challenge

横山弘毅さん・祐子さん

世代を超えたつながりを再生する

学校連携コーディネーターやGIGAスクールサポーター、社会教育士など6つの肩書を持ち、高梁市の教育現場活性化の最前線で活躍する横山弘毅さんと、地域おこし協力隊として空き家活用や移住者支援に取り組む妻の祐子さん。

もともと都内で教育関係の仕事をしていた横山夫妻は、高梁市のアドバイザーを勤める知人に誘われ、2020年8月に初めて同市を訪ねた。当初は年に数回足を運んでICT教育推進等の支援を行う予定だったが、「どうせやるなら腰を据えて本気で取り組みたい！」と同年12月に夫婦で移住。新生活をスタートさせた。

移住後に2人で始めたのは、地域の交流拠点づくり。そのひとつが16年前に閉店した日用雑貨品店『守内商店』の再興だ。空き店舗のシャッターを開けると近隣住民らが次々に集まり、かつての風景を語ってくれた。

「商品の売り買いやお裾分け、世代を超えた交流など、商店があったからこそ受け継がれてきた風土もあると思います。地域にそうした〝わたしあい〟の場を取り戻したいと思いました」

横山夫妻は築100年の旧守内商店の家屋を購入。地域の方々と共に約半年かけてリノベーションを重ね、2021年に子どもから大人まで誰もが気軽に立ち寄れる交流拠点『守内商店 備中高梁クリエイティブラボ』をオープンさせた。

子どもを歓迎するあたたかい風土

2021年には横山夫妻の下に第一子となる女の子が誕生。高梁市では結婚から育児までをサポートする相談窓口の設置や、子ども医療費の無料化（18歳までの保険診療自己負担分の全額補助）、各種奨学金制度の創設など切れ目ない子育て支援を行っているが、横山夫妻が特に子育て環境の豊かさを実感したのは、子どもを歓迎しみんなで育てようとするあたたかい風土だったという。

「都会で幼い子どもを連れていると肩身の狭い思いをすることも多いですが、高梁市では子どもを見ると地域の人が嬉しそうに声を掛けてくださったり、楽しい思い出を作ってもらおうと地域行事に誘ってくださったりするんです。子どもを通して縁がつながることも多く、人と人とのつながり合いの中で、子ども自身が『愛されている』と実感できる環境で子育てできる安心感があります」

地域と子どもたちのより良い未来のために

それぞれの仕事に場づくりに子育てにとエネルギッシュに活動する横山夫妻だが、地域の方々からは「こんな何もないところに、よう来たね」と言われることも少なくない。でも横山さんは「何もないのではなく、まだ魅力に気付いていないだけ」と話す。高梁市には歴史的な観光名所も県下有数の農業地帯もあるが、そのどちらにも行ったことがないという子どもも多い。そこで、弘毅さんは地域全体を学びのフィールドにする『備中高梁まるごとキャンパス』を企画。地域の子どもたちが高梁市のさまざまなエリアを訪れ、歴史や文化、自然に触れながらキーパーソンらと交流できる機会を生み出している。

「高梁市の良いところは、地域の人たちが教育に協力的で、子どもたちのために一生懸命になってくれるところ。その良さを活かしてみんなで教育環境を創っていくことが、地域と子どもたちのより良い未来につながると思うんです」

あたたかな風土の中で〝わたしあい〟の文化は、次世代へと受け継がれていく。

（上）「高梁市は、移住者を歓迎し、みんなで子どもを育てようとしてくれるまち」と横山夫妻　（下）市内中心部の商店街にも、かつて商業施設『エスカ』として親しまれた空き店舗を借り、高梁城南高校の生徒らが授業の一環で改修作業を行うなど、関わり合いの輪が広がっている